

第三回

中期・普及期（大正期「関東大震災前」）

日本の新しい住宅のモデルとなったアメリカ住宅

はじめに「バンガロー様式住宅」への興味

生活の洋風化の動きは、明治も後半になると一般庶民にまで浸透し始めていた。そうして生じた和洋が混在した生活は「二重生活」と称され、不経済で不合理なものとして批判されはじめ、時代の変化に沿った新しい生活や住まいが模索されるようになった。

こうした動きのなかで注目されたのがアメリカの住宅であった。歴史や伝統を尊ぶ欧州の住宅よりも合理的で新しい時代に適合していると考えられたからである。そして、バンガロー様式「別荘」住宅の居間を中心とした間取りに「家族本位」という新生活モデルが見出された。これに伴い、新しい構造形式としてツーバイフォー構造も注目され始めたのである。

アメリカ式新構造への注目

1909（明治42）年に、アメリカ建築界を視察した清水組支配人の原林之助は、建築学会の要請を受け、「米国視察談」と題する講演を行った。そのなかで、原は住宅建築に関する新しい動きとして、「カタログ」を見て「出来合」の住宅を注文するシステムが存在することを驚きとともに伝えた（図1）。また、

1913（大正2）年には、横河工務所の中村伝治がこの出来合建築について次のように述べている。

米国の安普請は、上記の如く柱は皆二吋の四吋位の板で立てられ、要所所に応じて同一材料を二枚でも三枚でも重ね合せて用うる（中略）仕口は切り欠く事をせず、に万事が釘付けなのであるから（中略）一見其薄弱な構造の様であるけれども、全体としてみれば小住宅位には之で耐力も充分なのであります（米国式安普請に就て）『建築工芸叢誌』第12号（1913年1月号）

「皆二吋の四吋位の板」とあるように、出来合建築がツーバイフォー構造によるものであることは明らかである。

中で、中村は角材を使わない簡易な構造であることから「安普請」と呼びつつも、アメリカで生まれた新構造を評価していることが窺える（図2）。

また、この新構造に注目したのが在米の秋山源太郎で、1921（大正10）年には、「米国の組立住宅に就て」（『建築世界』1921年1月号）の中で、アメリカの新構造によるバンガロー様式住宅を、板材だけを使うが、既製品を多用するため工期は短く、経費も安いと述べている。こうした記事を通し、アメリカの新構造は手間が少なく、工期も短く、また、廉価であるという理解が浸透していくことになる。

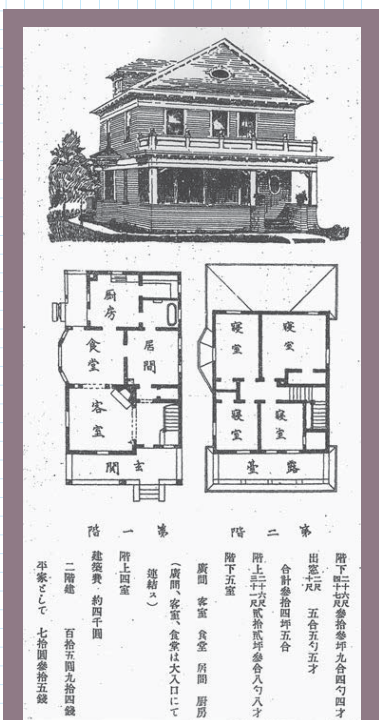


図1 原林之助が紹介した「カタログ」
 （『米国視察談』『建築雑誌』No.279, 1910年3月号）

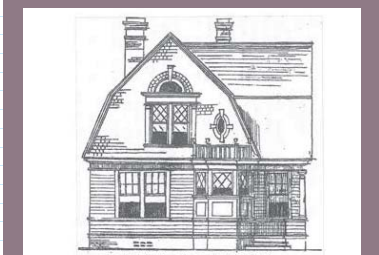
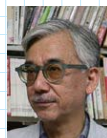


図2 中村伝治が紹介したアメリカ住宅
 （『米国式安普請に就て』『建築工芸叢誌』第12号 1913年1月号）



内田 青蔵 Seizo UCHIDA

神奈川県立工科大学工学部建築学科教授
 工学博士。専門は日本近代建築史。幕末・明治以降の住宅建築の歴史研究の第一人者。歴史的建築物の保存・活用を唱える。主な著書は『日本の近代住宅』（鹿島出版会）、「お屋敷拝見」（河出書房新社）など

アメリカ新構造建築の輸入例

アメリカ住宅への理解が深まるとともに、自ら輸入し建設する人々も現れた。1920(大正9)年、銀座松屋の支店長だった内藤彦一は、アメリカン・ポータブル・ハウス社(シアトル)の木造平屋建ての組立住宅を輸入し、鶴沼海岸に別荘として建てた。壁面はパネルだが、床は斜め張りの捨板と床板の二重床、小屋組も板材によるもので、基本構造はツーバイフォー構造を応用したものであった(図3)。

翌年には、参謀本部の佐藤少将もシアトル滞在中に同社の木造住宅を購入し、輸入した。工事を担当

した木田保造は、原価の4割の輸入税や運搬費を加えると、アメリカで廉価な住宅も輸入すると高くつき、日本の材料で建てたほうが安いと述べている。輸入税等の問題はあったが、関東大震災までの状況として、アメリカから住宅を輸入する人々は相次ぎ、

1922年には東京帝国大学医学部薬学教授でドイツ人の妻をもつ長井長義が、自邸及び息子たちの住まいとして、合わせて3棟のアメリカ製の組立住宅を輸入し建設するなど新住宅として注目されていた。

住宅実物展に出品された ツーバイフォー住宅

こうしたアメリカ住宅が話題になるなかで、新構造のアメリカ住宅を理想的住宅のモデルと主張する人々が現れた。1922(大正11)年、上野の東京平和記念博覧会会場の一郭に、わが国初の住宅実物展が開かれた。建築学会の主催で、14棟の実物住宅が展示されたのである。

出品作の多くが、様式や間取りはアメリカのバンガロー式住宅の影響を受け、そのうちの1棟は、アメリカの新構造による住宅であった。小澤慎太郎が出品した住宅は、次のように紹介された(図4)。

構造法は米国に流行する規格統一せられたる「バルン式」を採用し、大體の軸部は厚二吋巾四吋の米松材を使用し、工費の節減及び工事期間の迅速を計り……

(「文化村住宅設計図説」 鈴木書店 1922年)

構造は「バルン式」を採用し、小屋組は「コーラービーム」^[※2]とある。ここからバルーン・フレーム構造であることは明らかで、その採用理由は工費の軽減と工期の速さであった。

また、飯田徳三郎の作品は、「レデーカット」^[※3]式の耐震的住宅と呼ばれ、解説には「米国のレデーカット式に拠つたもの」とある。構造は、純粹なツーバイフォー構造ではなく、日本の地震に配慮して伝統的な角材を使用しつつも、部材としてアメリカの出来合品を使ったものであった(図5)。

このように、1920年代になると、アメリカ住宅は新住宅のモデルとして注目され、ツーバイフォー構造という独自の構造形式は一部では安普請建築と呼ばれたが、工費の軽減と工期の短縮化という利点を有する構造であると、広く認識されていたのである。

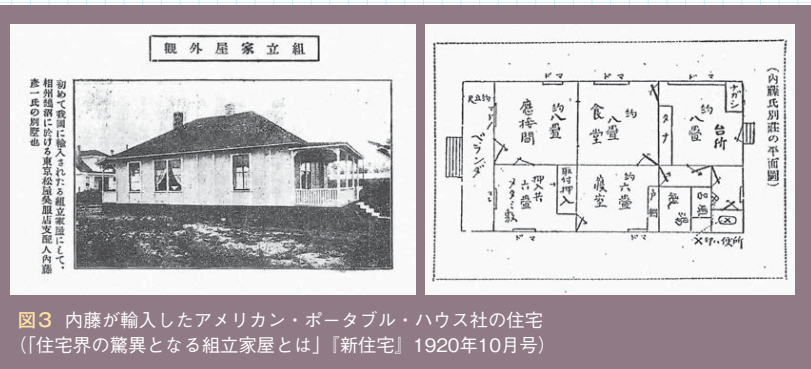


図3 内藤が輸入したアメリカン・ポータブル・ハウス社の住宅(『住宅界の驚異となる組立家屋とは』『新住宅』1920年10月号)

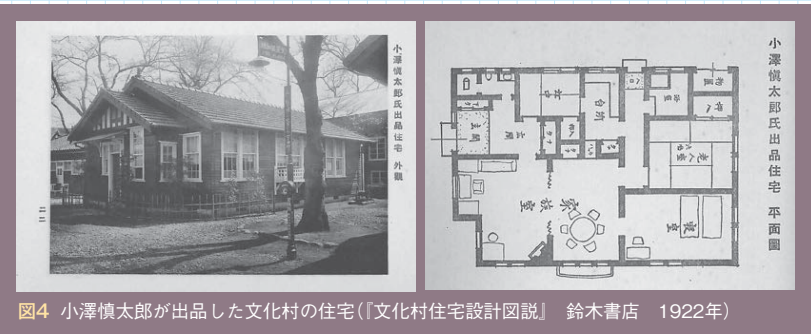


図4 小澤慎太郎が出品した文化村の住宅(『文化村住宅設計図説』 鈴木書店 1922年)



図5 飯田徳三郎が出品した「レデーカット」式の耐震的住宅(『文化村住宅設計図説』 鈴木書店 1922年)

※1バンガロー様式：インドを起源とするもので、ベランダを配した開放的な建築。
 ※2コーラービーム：「カラービーム(垂木つなぎ)」のことで、これを採用することで小屋部分は三角形の構造体となる。
 ※3レデーカット：既製品による建築部材の総称。

参考文献

- 内田青蔵「温故知新の住宅づくり」『GOOD LIVING SHOW '91』1991年
- 内田青蔵「わが国近代独立住宅の変遷過程における米国住宅の影響について」『住宅総合研究財団 研究年報』No.23, 1996年

本連載の執筆者である内田青蔵氏が、(一社)日本建築学会の2017年日本建築学会賞(論文)を受賞されました(研究テーマ：「わが国の住宅の近代化に関する一連の歴史研究」)。